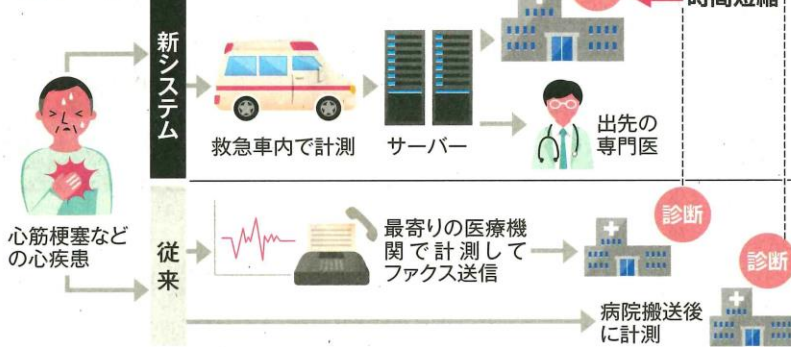


製鉄病院が道内初導入 救急車からの心電図伝送

治療開始を5分短縮

クラウド型12誘導心電図伝送システムのイメージ



製鉄記念室蘭病院が本年度導入したクラウド型12誘導心電図伝送システムが、一刻を争う心疾患の救命に効果を上げている。救急車の中で心電図を計測して医師が即座に診断する仕組み。図1で、病院到着後の迅速な治療につながっている。同病院に

4〜8月平均 心疾患救命に効果

心筋梗塞や狭心症などの心疾患はがんに次いで死亡率が高く、突然死の死因で最も多い。心疾患が疑われた段階で早急に心電図を計測して診断し、患者を病院に受け入れる準備を始めるのが望ましい。従来は病院に到着してから計測する

製鉄記念室蘭病院 循環器内科

高橋弘科長に聞く

クラウド型12誘導心電図伝送システムを導入した背景や利点、課題を製鉄記念室蘭病院循環器内科の高橋弘科長(54)に聞いた。

—システムを導入した狙いは何ですか。

「日中はスタッフが病院に

よると、道内での導入は初。ただ現状では同病院が費用を負担して専用機器を載せた救急車2台でしか使えず、全ての患者が恩恵を受けられるわけではない。

(生田憲)

緊急治療した67件のうち、外来に到着してから血流を再開させる治療を始めるまでの平均時間は、同システムを使った場合が13分で67・9分。同システムを使わ

ずに救急搬送した43件に比べて5・5分、救急車を利用せず来院した11件に比べて18・2分短かった。

同システムは外出先でもタブレット端末で心電図を確認できる利点がある。仮に当直医が診断を迷う微妙なケースがあっても、常に専門医が対応できる。

室蘭市、登別市、西胆振行

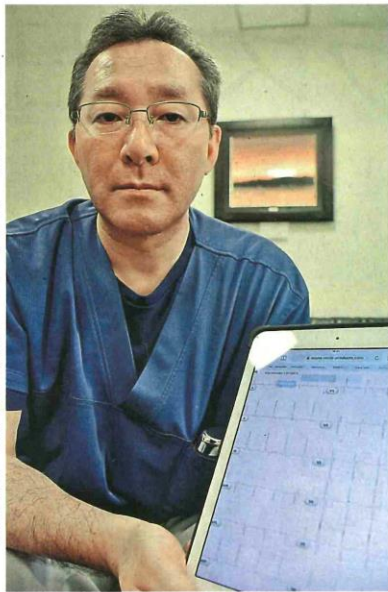
「救急隊からアクセスキー(鍵)をもらい、アプリで見ます。一度救急外来で受ければ関係者全員で共有できます。心電図を写真で送る地域もあります。アプリの方が鮮明ですね」

—システム搭載の救急車が2台しかありません。

「当院も予算があるので一部しか機器を積めていません。搭載車に乗った方が早く治療を受けられるのは確か。喫緊の課題です」

—やはり早い治療が必要なんです。

「いまだに病院に着く前に亡くなる方が3〜4割います。20年前は半数の方が亡くなった。心疾患は若い方、働き盛りの方も多い。本人の命をつなぐだけでなく、ご家族や地域にとっての損失も減らしたい。北海道は面積が広く、救急搬送に時間がかかる。北海道にこそ必要なシステムです」



心電図が表示されたタブレット端末を手に話す高橋医師

アプリで情報共有 専門医の効率運用にも

「夜間は自宅から呼ばれます。患者さんが病院に着いて心電図を計測して診断してからスタッフが呼び出すとなると、時によって40〜50分かかります。その部分を縮めれば、どれだけ長く生きられるかや、生活に必要な身体機能を回復できるかが変わります」

—定期フェリー航路で結ばれた岩手県宮古市の事例を参考にしましたか。

「状況が似ています。循環器

「循環器内科医だけで24時間365日運用するのは疲弊して無理なことです。宮古は救急外来をいろいろな科の先生が受け持ちます。そういう先生方に夜間にいらして、心筋梗塞の波形なら呼び出してもらう。すると循環器内科医が常に病院にいる必要は無くなります。当直医が迷ったら相談してくればいい。クラウドでは医師がどこにいても心電図を見られます」

「循環器内科医だけで24時間365日運用するのは疲弊して無理なことです。宮古は救急外来をいろいろな科の先生が受け持ちます。そういう先生方に夜間にいらして、心筋梗塞の波形なら呼び出してもらう。すると循環器内科医が常に病院にいる必要は無くなります。当直医が迷ったら相談してくればいい。クラウドでは医師がどこにいても心電図を見られます」